

「 二度の豪雨体験から学んだこと 」

岐阜県 下呂市立萩原小学校 6年 木下 愛智

ぼくは、岐阜県下呂市の山と川に囲まれた自然豊かな場所で暮らしています。そして、2020年の7月豪雨と翌年の8月豪雨で、一瞬の間に様相を変える自然の恐ろしさを痛感しました。川の氾濫で知り合いの家が床上浸水したり、馴染みのあるスーパーの前の道路が崩落したり、土砂災害で一時孤立状態にもなりました。全国ネットでは氾濫危険水位を超えるアナウンスが伝えられて、遠い親戚からも心配の連絡が来るほど命の危険がともなうとても怖い体験を二度もしました。

その時に一番大切だと気付いたのは、住民一人ひとりが避難方法やタイミング、避難経路などを記入した『災害・避難カード』の備えです。なぜならぼくは毎年9月にある地震を想定した避難訓練に参加していたので、避難経路は把握しているつもりでした。でも、豪雨の時は避難場所が違うので、いざ避難となってもハザードマップがすぐには手元になくて慌ててしまい、特に一度目の豪雨では、迅速な行動ができなかったからです。また、下呂市全域に避難情報が発令されると、近くの指定避難所がいっぱいになってしまい、停電などにより連絡もまともにとれない中で避難場所を探すのは大変でした。山側は土砂災害、川側は出水、冠水の危険がある地域で、改めて確認してもハザードマップ上で示された安全な場所がとても少なく、指定避難場所だけではなく、安全な親戚・知人宅や旅館なども含めた複数の避難先や避難経路をあらかじめ決めておく必要があると感じました。そのためには災害・避難カードや非常持出袋の備えで自ら守る「自助」と、近隣で助け合う「共助」が必要不可欠になってくると確信しました。それに、いつ避難情報が発令されるか分かりません。ぼくは真夜中に避難情報が発令された時は、避難するのは難しく、サイレンが鳴り響き、雨の叩きつけるような音がする中で、「水かさ増えないで」と祈りながらとても不安な夜を過ごしたのを今でも覚えています。だから、明るいうちの早めの避難もとても大切だと身にしみて感じました。

またぼくの地域では、今年はコロナの影響で防災を学ぶ運動会ができず、地区内の過去の災害や防災対策、歴史、文化などを学びながら歩く「知る区ウォーキング」という新たな試みが行われた特別な年となりました。回覧でも「ふるさと学習テキスト」が閲覧できて、家の近くの町営住宅跡地の消防詰め所は昭和33年豪雨で一帯が浸水してかさ上げされており豪雨時の危険箇所にも示されていると知り、過去の災害から学ぶことは非常に多くて、地域ぐるみで改善を反映させていくことはとても大切になってくると学びました。そして、二度の豪雨後の街並みも堤防が決壊した所には石嚢が備えられるようになり新たにコンクリートブロックが作られたり、いろんな人たちのおかげで災害に強い街へと変わっていく姿をこの目で見てきました。道路の崩落で国道が通れない間は、信号のない狭い裏道をみんなで譲り合って通る姿が見られました。道路が復旧した場所には感謝の気持ちで「ありがとう」と書かれた横断幕が今でもあって、そこを通ると災害を乗り越えるためには「地域みんなの支え合い」がとても大切なんだと思わせてくれます。

この機会にぼくは家族で話し合い、災害・避難カードを作成しました。そして県の公式防災アカウントでは便利な機能がたくさんあることも発見できました。

近年、地球温暖化の影響で集中豪雨などによる深刻な被害が全国的に増加しています。災害を他人事と思わず、個人の住宅や財産、時には尊い命が奪われてしまわないように、ぼくと一緒に防災の一步を踏み出してみませんか？